

SNSにおける「界限」形成とその言語的特徴

法学部政治学科4年生 鵜飼星海

- I. はじめに
- II. 先行研究:現代社会におけるコミュニティの変容と「界限」成立の社会的基盤
 1. 固定的共同体から流動的つながりへ:「リキッドモダニティ」
 2. 「地域縁」から「選択縁」へ:宮台(2015)の指摘
 3. SNS時代における「つながり」の変質と「界限」概念の萌芽
- III. 「界限」における言語的特徴
 1. 「界限」の形式:どのように使われているか
 - 1-1. 単独使用
 - 1-2. 名詞+界限(○○界限)
 - 1-3. 形容詞的修飾を伴う場合
 2. 「界限」の意味と意味の流れ
 - 2-1. 本来の意味
 - 2-2. 中間的用法:業界的界限
 - 2-3. 現代SNSの意味
 - 2-4. 抽象的メタファーとしての「界限」
 - 2-5. 分類
- IV. 「界限」データ分析
 1. 調査内容と方法
 2. 調査結果
 3. データ分析
 - 3-1. データ1.(2007-2009年)の分析
 - 3-2. データ2.(2024年)の分析
 - 3-3. データ1.とデータ2.の比較と考察
- V. 考察
 1. 「リキッドモダニティ」と「界限」の親和性
 2. 「選択縁」の究極形としての「界限」
 3. 言語的特徴とコミュニティ形成の関係
 4. 考察のまとめ
- VI. おわりに
- VII. データの記載(この章のみ別紙)
 1. データ1. (2007-04-04～2009-05-08)の記載
 2. データ2. (2024-10-23)の記載
- VIII. 参考文献、辞書・コーパス

I. はじめに

現代社会において、インターネット、とりわけソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)は、私たちのコミュニケーションとコミュニティのあり方に質的な変容をもたらした。従来の地縁や血縁といった固定的・物理的な共同体が相対化される中で、人々は物理的距離を超え、関心や趣味、価値観といった内的な基準に基づいて新たなつながりを形成している。こうした流動的なつながりの中で、近年特に注目すべき言語現象として、「界限」という語の用法が挙げられる。

「界限」は本来特定の地理的範囲を指す言葉であり、「駅前の界限」や「この界限の住人」といった用法が一般的であった。しかし、SNSの普及以降、「音楽界限」「アイドル界限」といった特定の業界や趣味の集合体を指す中間的な用法を経て、さらには「風呂キャンセル界限」「人間を許すな界限」といった、特定の行動様式や感情を共有する人々の、より抽象的で一時的な「まとまり」を指す表現として、その意味は大きく変容し、多義性を帯びてきた。この言葉は、単なる流行語にとどまらず、現代社会におけるコミュニティの捉え方や、人々が自己の帰属意識をどのように確認・強化しているかを解き明かす鍵であると本稿は考える。このような「界限」という語の用法がなぜこれほどまでに浸透し、多様な意味を持つようになったのか。その背景にはどのような社会的、そして言語的なメカニズムが働いているのだろうか。本稿はこれらの問いに答えることを目的とする。

「界限」概念そのものを学術的に扱った先行研究は、現時点では極めて限定的である。しかし、本稿が扱うテーマは、既存の社会学や言語学における複数の研究領域と密接に関わるものである。具体的には、SNSにおけるオンライン・コミュニティの形成、集合的アイデンティティの構築、インターネット・スラングや俗語の変遷に関する研究などが挙げられる。本稿はこれらの先行研究の知見を参照しつつ、ジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman、以下、バウマン)が提唱した「リキッドモダニティ(Liquid Modernity)」(液状化した近代)や、宮台真司が指摘する「地域縁」から「選択縁」へのコミュニティの変遷という理論的枠組みを適用することで、「界限」という語が持つ現代的な意味を体系的に分析する。これらの理論を用いることで、流動的で不安定な現代社会において、人々がなぜ「界限」という形で一時的で緩やかなつながりを求めるのか、その社会心理的な背景を明らかにすることができる。

本稿は以下の構成で論を進める。まず第II章では、バウマン(2001)の「リキッドモダニティ」と、宮台(2015)の「地域縁」から「選択縁」への変遷という概念を詳細に解説し、現代社会におけるコミュニティの変容の現状を整理する。この理論的基盤の上に、SNS上の「界限」概念が成立した社会的背景を考察する。第III章では、「界限」という語の言語的特徴を分析し、その形式(単独使用、名詞+界限など)と意味の変遷(地理的→業界的→趣味・関心→SNS特有の文化圏)を体系的に記述する。続く第IV章では、X(旧Twitter)から収集した過去と現在のデータを比較分析し、意味の変遷が実際にどのように進んだのかを実証的に示す。そして第V章では、データ分析の結果と第II章で提示した社会理論を統合し、なぜ「界限」が現代において重要な概念となったのかを考察する。最後に、第VI章「おわりに」では、本研究の結論と、今後の研究課題について述べる。本研究は、「界限」という語の分析を通じて、現代社会における流動的なコミュニティのあり方と、その形成・維持における言語の役割の一端を明らかにすることを試みるものである。

II 先行研究:現代社会におけるコミュニティの変容と「界限」成立の社会的基盤

現代社会において「界限」という概念が普及した背景には、近代社会がもたらしたコミュニティの変容という大きな潮流が存在する。本章では、バウマン(2001)の「リキッドモダニティ」、そして宮台(2015)の「地域縁」と「選択縁」の概念を援用し、現代の社会コミュニティがいかにして「界限」という新しい形態を生み出すに至ったのかを論じる。

1. 固定的共同体から流動的つながりへ:「リキッドモダニティ」

近代社会は、個人と社会の関係を根本的に変容させた。前近代においては、個人の所属集団は家族、村落、宗教共同体など、生まれや生活環境によってほぼ自動的に決定されていた。これらは人間関係や社会的役割が予め規定されているという点で「与えられた共同体」であり、個人の選択の余地は小さい。個人のアイデンティティは、こうした固定的で安定的、かつ長期的な関係性の中に深く根ざしている。バウマン(2001)は、この段階を「ソリッド(固形)な近代」と表現している。

しかし、20世紀後半以降、産業化や都市化のさらなる進展、グローバル化、そして情報技術の発達によって、社会は劇的な流動性を獲得した。転職の一般化、非婚化や核家族化の進行、そして国境を越えた人の移動は、個人の所属を固定する枠組みを次々と解体していった。このような社会的流動性の増大は、従来のように地縁や血縁に依拠した「強制的な共同体」に代わって、自らの関心や価値観に応じてつながりを選び取る「選択的共同体」への移行を促すこととなった。このような社会全体の流動化を理論的に捉えたのが、バウマン(2001)による「リキッド・モダニティ(液状化した近代)」の概念である。

バウマン(2001)によれば、液状化した現代において、人間関係や社会的ポジションは、もはや安定的で長期的なものではなく、常に変化を前提とした可変的・一時的なものへと変質している。個人は、確固たる「帰属」の代わりに、いつでも変更・離脱可能な「選択」を迫られる。このような状況下で形成される関係性は、持続性よりも利便性や即時性を重視し、しばしば一過性である。人々は流動する情報の海の中で、自身のアイデンティティを複数の断片的なつながりによって構築するようになる。かつてのような全人格的な関係性は希薄化し、「特定の側面においてのみ関わるつながり」が主流となる。こうした状況はSNSの普及と深く連動しており、後述する「界限」の成立基盤を形成していると言える。

2. 「地域縁」から「選択縁」へ:宮台(2015)の指摘

日本社会において、コミュニティの変容を社会学的に捉える視点として有用なのが、宮台(2015)の提示する「地域縁」と「選択縁」の概念である。宮台(2015)は、戦後日本社会においては、地理的な近接性や家族関係を基盤とする「地域縁」が支配的であり、そこでは個人は「自動的に包摂される存在」として機能していたとする。すなわち、所属と役割は社会構造に組み込まれており、個人はそれに身を委ねることで社会的存在と見なされていたと考えられる。

しかし、高度経済成長以降の都市化、核家族化、終身雇用制の動きなどによって、地域縁の共同体は解体され、共同体の持つ包摂力や規範力は著しく弱体化した。そうした中で、個人は新たなつながりを自らの意思で選択しなければならなくなった。このようにして台頭したのが、「選択縁」に基づく共同体である。選択縁と

は、趣味や関心、価値観、感性といった内的基準に基づいて構成される関係性であり、インターネット上ではこの傾向が顕著に観察される。

選択縁に基づく共同体では、互いに深く立ち入らない「ゆるやかなつながり」や、「一定の価値観の共有を前提とした結束」が特徴となる。このような関係は、地理的拘束を受けず、また物理的接触も伴わないことから、より軽量で機動的でありながら、一方で同質性の確保を求める傾向が強まる。SNS上で形成される「界限」は、まさにこうした選択縁的な共同体の現代的表現の一つであると考えられる。

3. SNS時代における「つながり」の変質と「界限」概念の萌芽

「リキッドモダニティ」による社会の流動化と、地域縁の解体による選択縁の台頭という二つの流れは、SNSの登場によって決定的な方向性を与えられた。Twitter（現X）、Instagram、TikTokなどのSNSは、物理的距離の制約を完全に排除し、多様な人々が瞬時に、かつ双方向に情報を交換するプラットフォームを提供した。これにより、趣味や価値観を共有する他者との出会いが格段に容易になり、多様な「選択縁」的な共同体が無数に形成されるようになった。

SNSの匿名性や一方向的な発信のしやすさは、個々人が全人格的な関わりを避けて、「特定の側面」のみを切り取った関係を築くことを可能にした。さらに、ハッシュタグやアルゴリズムは、共通の関心を持つユーザーを可視化し、微細な感性や感情までもが共有されうる場を作り出した。こうした仕組みの中で、人々はしばしば「〇〇界限」と呼ばれる、固定された組織や明確なメンバーシップを持たない、ゆるやかな集団を形成する。

この「界限」は、バウマン(2001)が論じた流動的なつながり、そして宮台(2015)が指摘した「選択縁」の論理が、SNSというプラットフォーム上で具現化された典型的な例であると言える。属するか否かは自己選択であり、関係性は個々人の裁量に委ねられ、他者からの強制力は希薄である。しかし、同時に「界限」は、特定の言語表現や共通の話題、共有されるネタなど、内的な共通了解を形成するためのコードを必要とする点で、独特の「共同体性」を確かに有している。

本章では、SNSにおける「界限」の出現が、現代社会におけるコミュニティの変容という大きな流れの中でどのように位置づけられるかを明らかにしてきた。以下、次章ではこの「界限」における言語的特徴の分析に移行し、実際の投稿や言語使用の事例を通じて、「界限」的共同性の形成における言語の役割を考察する。

III 「界限」における言語的特徴

「界限」という語が現代的なコミュニティ概念を表すようになった背景には、その言語的特徴、特に多様な文脈で柔軟に用いられる語用論的な機能が存在する。本章では、SNS上での「界限」の具体的な用法を分析し、その形式と意味の変遷を体系的に整理することで、「界限」という語が現代のコミュニケーションにおいて果たす役割を明らかにする。

1. 「界限」の形式:どのように使われているか

ここでは、「界限」という語が単独で使われるのか、「〇〇界限」のように修飾語と共に使われるのかなど、形

態的な特徴を扱う。大きく3つに分類できる。「単独使用」、「名詞＋界限(〇〇界限)」、「形容詞的修飾を伴う」の3つである。これらの形式は、それぞれ異なるニュアンスや機能を持っており、例も使用しながら以下で説明する。

1-1. 単独使用

「界限」という語が単独で、特定のコミュニティや人々を指し示す場合である。この用法では、文脈から指し示す対象が暗黙的に共有されていることが前提となる。例えば、「界限がざわついている」という表現は、特定の出来事に対して共通の関心を持つ人々の間で動揺や話題が広がっている様子を端的に表現する。また、「この界限では当たり前だ」という言い回しは、ある特定の行動様式や規範が、その集団内で共通認識となっていることを示唆している。このように、単独使用される「界限」は、特定のコミュニティの存在を前提としつつ、その内部の動向や規範を簡潔に表現する機能を持つ。

1-2. 名詞＋界限(〇〇界限)

この形式は、SNS上における「界限」の最も典型的な用法であり、高い語彙生産性を持つ。名詞に「界限」を付加することで、特定のテーマや属性を持つ集団を新たに創出することができる。その対象は、趣味や関心、業種、そしてより抽象的な事柄にまで及ぶ。

趣味・関心系: 「ゲーム実況界限」「アニメ界限」「鉄道界限」など、共通の趣味や関心を持つ人々を指す。

業種・専門分野系: 「IT界限」「広告界限」「学術界限」など、特定の業界や分野に属する人々を指す。

より抽象的な概念: 「承認欲求界限」「お気持ち表明界限」「推し活界限」など、特定の行動様式や価値観、社会現象などを指す。

この用法は、自らの所属や関心を表明するだけでなく、他者を特定のカテゴリーに分類する際にも用いられる。多様な「〇〇界限」が日々創出されることは、現代社会において人々の関心やアイデンティティが、細分化され、流動化している状況を反映していると言える。

1-3. 形容詞的修飾を伴う場合

「界限」という語が「〇〇界限的」というように形容詞的に用いられ、特定のスタイルや雰囲気表現する場合である。この用法は、特定のコミュニティの持つ独特の雰囲気を言語化し、他者と共有するためのメタファーとして機能する。例えば、「〇〇界限っぽいファッション」という表現は、その特定の界限で流行している、あるいは共通して見られるスタイルを指し示す。これは、ある集団が持つ暗黙的な規範や美意識が、言語を通じて可視化されていることを示している。

2. 「界限」の意味と意味の流れ

次に意味について論ずる。「界限」という語の意味は、時代とともに大きく変化してきた。本研究では、その意味の流れを4つの段階に分類する。この変遷は、SNSの普及と密接に関連しており、コミュニティの概念が物理的なものから非物理的なものへと移行する過程を反映している。尚、以下で使用する具体例はIVで説明するデータから抜粋されている。

2-1. 本来の意味

「界限」の最も古い用法は、特定の地理的な範囲や、その周辺地域を指すものであった。この意味は現在でも広く用いられており、「駅前の界限」「この界限では…」といった表現がその典型である。この用法における「界限」は、物理的な場所の近接性に基づく集団であり、そのメンバーは地縁によって結ばれている。『デジタル大辞泉』にもよれば「そのあたり一帯。付近。近辺。」を本来意味している。古い辞書などを確認する限り、この意味しか掲載されていない辞書もあるため、おそらくこれが本来の意味である。例として、『広辞苑 第六版』や『新明解国語辞典 第七版』では、いずれも「地域的な範囲」「近辺」の意味のみを載せており、SNSで使われるような比喩的・抽象的な意味合いは見られない。このことから、地理的な意味が「界限」の語の原義と考えられる)。例えば、X(旧Twitter)上では以下のような例が見られる(データ1.より)。

「あの界限の温泉や酷道にはたまに出かけてます」

「そもそも西神ニュータウン界限はTV電波悪くて民法見るのにも金かかる」

「東京駅界限なう。」

「これから昼飯何食べよう？今日も自由が丘界限は賑わってる」

これらの例/用法で特徴的に見られるのは、「界限」が現実の地理的な空間や地域性に結びついた意味で用いられている点である。都市名や地名、施設名などと結びついて、日常的な行動範囲や移動圏を柔軟に指し示す語として使われていることがわかる。

2-2. 中間的用法: 業界的界限

高度経済成長期以降、特定の業種や専門分野に属する人々を指す用法が生まれた。「音楽業界界限」「広告界限」などがその例である。これは、地縁から離れ、特定の関心や職業に基づくつながりを指す用法であり、物理的な空間を共有しなくてもコミュニティが成立するという、非物理的なコミュニティの萌芽を示している。「界限」には特定の業種・職種・文化的領域を指す意味もある。例えば、X(旧Twitter)上では以下のような例が見られる(データ1.と2.より)。

「D3が機嫌が悪いナウ、思い切ってMacの火狐を再インスコするなう、家について夕飯なう、カタハネい

んすと〜るなう、自分のアニメ業界界隈の知識のありすぎな状態にどんびきなう、帰るなう、というわけ
で今日も京王線のハイパー満員電車で揺られながら帰宅なう」

「IT界隈で「クラウド時代の〇〇」ってのが流行ってるっぽいけど、どうしても「FF7無印？」とか連想して
しまって駄目だ。ヴィンセント(DIRGE OF CERBERUS)→タークス(BEFORE CRISIS)→ザックス(
CRISIS CORE)と来て、ここで原点回帰的な……」

「改めてエンジニア界隈のGmail普及度に驚いた一日」

「マーケティング界隈でよく使われる」

これらの例/用法で特徴的に見られるのは、「界隈」が単に地理的な意味ではなく、ある業種や関心領域に
属する人々やその文化・言動のまとまりを象徴的に表す語として機能している点である。投稿文脈からは、共
通の専門知識や行動様式、時に内輪的なジョークや価値観が共有されていることが読み取れ、「界隈」という
語によってそれらが一括りにされている。このように「界隈」は、物理的空間ではなく、社会的・職能的ネット
ワークに基づいた象徴的な空間を指す語として拡張的に用いられている。

社会的・経済的ネットワークを共有する集団を指すため、地理的用法より抽象的だが、SNS的な「界隈」(以
下2-3にて説明)と比べると構造が明確である。職業的・制度的なネットワークは比較的安定した社会関係に
よって支えられており、偶発的なつながりが前提となるSNS的「界隈」とは異なる構造を持っていると考えられ
る。

2-3. 現代SNS的意味

この用法はSNSを中心に「趣味」「関心」「価値観」「属性」等でつながる非明示的な集団を指す。SNSの普及
以降、趣味や関心、嗜好を共有する人々を指す用法が主流となった。データ分析でも示されるように、「アニメ
界隈」「アイドル界隈」といった表現が頻繁に用いられるようになった。この段階の「界隈」は、地理的・物理的
な制約から完全に解放され、インターネット上の緩やかなつながりを指す概念として定着した。これは、非明
示的な集団で選択縁的なコミュニティが広く形成されるようになったことを示している。例えば、X(旧Twitter)
上では以下のような例が見られる(データ1.と2.より)。

「オタク界隈の人に誤解があるとすれば、90年代のロックはそれこそスクールカーストの下の方の文化
だから。」

「いやー、音楽エリアに一通り認知が広がって、今度は映像方面での進出が盛んなのかなあとか。ミク
界隈。」

(注釈:クリプトン・フューチャー・メディアが発売しているバーチャルシンガーソフトウェア及びそのキャ

ラクターの初音ミクとそのファンの界隈を指してると考えられる。)

「ネットゲ界隈も気狂いが多くてウォッチしてて楽しい。」

「エロゲってやるのすげーめんどくて、自分もたまにしかやらないんだけど、エロゲ界隈のTLはけっこう楽しいんだよなあ。」

「ニコニコ界隈で起きている著作権がらみの話は、いつか通らなければいけない道だったのかもしれない。それがたまたま今だけ。」

「アイマス界隈の編集技術はあいかわらずありえん」

(注釈:「アイマス」はバンダイナムコエンターテインメント(旧:ナムコ)から発売されている育成シミュレーションゲーム、およびメディアミックスのシリーズ「アイドルマスターシリーズ」というゲームを指すと考えられる。)

これらの例/用法で特徴的に見られるのは、「界隈」という語が、物理的な場所ではなく、共通の話題・関心・文化的コードを共有する人々の集まりを示すラベルとして機能している点である。使用者は「オタク」「エロゲ」「ネットゲ」「アイマス」などのキーワードを通じて、自らが属する、あるいは観察する集団の文化や動向を把握・語るために「界隈」を活用しており、これによりSNS上のコミュニティが可視化されている。

この意味では、「界隈」の前にくる名詞は物理的場所ではなく、より抽象的な話題の中心・共通の価値観等が表れる例えば、村上(2021)は、SNS上で用いられる新しい語法がユーザー同士のつながりやコミュニティの輪郭を「言語的にマークする」働きをしていることが指摘されており、「界隈」もその一例と考えられる。

2-4. 抽象的メタファーとしての「界隈」

SNS上の「空間性」を仮構し、関係性のネットワークをも示す用法は、「界隈」の意味変遷の本研究執筆時点での最終段階であり、SNSの文化が成熟した現代において顕著に見られる用法である。この段階では、「風呂キャンセル界隈」「人間を許すな界隈」のように、特定の行動様式や感情、言説スタイルなどを指す、より抽象的な概念として用いられる。この「界隈」は、明確なメンバーシップを持たず、特定の属性や傾向を持つ人々をゆるやかに束ねるメタファーとして機能している。これは、「界隈」という語が、特定のコミュニティを指すだけでなく、社会的な現象や特定の言説空間を記述するための言語ツールとして進化していることを示している。例えば、X(旧Twitter)上では以下のような例が見られる(データ2より)。

「終局という人間を許すな界隈ね」

「陰謀論の界隈も普段イスラエルがーアメリカがーって言ってるじゃん。そのイスラエルで戦争被害起こって中東戦争起きそうってのに...時間帯かな???朝になったら阿鼻叫喚なのかな???」

「最近毎日フロスキップ界限だわ」

「職スキップ界限がよ」

「秋服スキップ界限とか出来たらおもしろそう」

「頼むから鳥居先生みたいなまともなフェミニストが、画像みたいな自称フェミニストを諷めてくれ。これがこの人だけでなく、自称フェミ界限の氷山の一角なのがやばいんだよ自称フェミにはフェミニストの言葉しか響かないので、自浄作用を……」(以下略)

「じゃあさ!シジミ界限とかもあんのかな!なにそれ!気になる!」

「浸透している 縦読み界限」

この用法は、「界限＝場所」ではなく、「界限＝関係構造／属性集合体」として用いられていることが特徴である。もはや明確なメンバーシップや自覚的なつながりを伴う「コミュニティ」としての意識が希薄であり、ある属性や言動、言説スタイルを共有または観察される人々をゆるやかに束ねるラベルとして「界限」が機能している。「界限」は一種の語用論的ラベルとして、外部から観察・皮肉・揶揄・共感といったさまざまな語用的機能を果たしており、内的結束というよりは、分類・参照・記号化のために使われる場面が多い。これにより、「界限」はしばしば「ある傾向を持つ人々」や「同様のふるまいをするアカウント群」を指す曖昧な集合記述として用いられる。例えば、社会学者の吉見(2018)は現代におけるネットワーク型社会の「断片的なつながり」や「観察される主体の集合性」を指摘しており、こうした構造の中で、ユーザーが「界限」という語を使って関係性の輪郭を仮構する現象と一致する。また、言語学的観点からは、加藤(2021)において、メタ言語的・指示的な用法の進展についての議論があり、「界限」のような語がどのように話者のスタンスや含意を込めた表現に使われるかの理論的補強となる。

2-5. 分類

上の4つの意味用法を分類し直すと、以下のようになると考えられる。

- ①地理的界限(例:銀座界限)
- ②業界的界限(例:出版界限)
- ③趣味・関心系界限(例:実況者界限、○○ゲーム界限)
- ④SNS特有の文化圏(例:風呂キャンセル界限、水色界限、自然界限)

この分類の変遷も、基本的には①から④の順に広がってきたと考えられる。

それぞれの用法の厳密な出典を確定するのは難しいが、辞書的記述の変遷からある程度の推定は可能である。たとえば、『広辞苑 第六版』や『新明解国語辞典 第七版』などの伝統的な国語辞典では、「界限」は①のような地理的意味のみを記述しており、②以降の意味用法は見られない。

一方、より最近の辞書では②の「業界」的な意味に言及する例も出てきている。例えば『精選版 日本国語大辞典』では、用例として「映画界限」などが挙げられている。これにより、①から②へと用法が拡張してきたと見ることができる③や④の用法については、従来の辞書類には記載がないものの、SNS上では2010年代以降に頻出し始めており、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』や、町田(2020)を含むSNS言語を扱った先行研究などにより、比較的近年に広がったものであることは確実である。④の用法、すなわち「水色界限」「〇〇キャンセル界限」など、意味的には曖昧で関係属性を示す抽象ラベルとしての「界限」は、③よりも後に登場したと考えられ、少なくともX(旧Twitter)以降の文化の影響が大きい。

したがって、①→②→③→④の順に、意味が地理的・具体的なものから、より抽象的・属性的なものへと変化・拡張していったとする仮説は、辞書・用例・コーパスの観察から一定の妥当性をもって支持できる。

本章では、SNSにおける「界限」が、多様な形式と意味合いで使用されていることを明らかにした。次章では、これらの言語的特徴が、実際のデータ分析においてどのように表れているかを実証的に検証する。

IV. 「界限」データ分析

実際に「界限」が具体的にどのように使われていて、どれくらい多様に使用されているのか、そして「界限」という単語の使用方法がどのように変容したのか調査するために、データ分析を行う。この章では、調査理由、調査内容の詳細、調査方法、調査分析について記述する。

1. 調査内容と方法

Apifyというデータ抽出ツールを使用し、X(旧Twitter)から「界限」という単語が使用されているポストを抽出しエクセルにまとめた。過去と最近の使用方法を比較するために、具体的には2007年4月4日から2009年5月8日までの1万件(本論文内ではデータ1.とする)と、2024年10月23日中の1万件(本論文内ではデータ2.とする)をApifyからデータそれぞれとり、それぞれのデータを10分の1の1000件まで絞り、比較した。

なぜ、データ1. は2007年からなのかというと、一番古い日本版X上のデータがそこからあったためである。Twitter(現X)がアプリとして正式に発足したのは2006年7月15日であり、日本版は2008年4月からも公開されている。恐らく日本版Twitterが公開される前からTwitter上に「界限」というワードを含むポストを残したTwitter使用者がおり、少なくとも筆者が見る限り、Apify上では最速が2007年4月4日であり、「界限」というワードを含むポストが1万件に登るまで2009年5月8日までかかった。

その一方でデータ2. の2024年10月23日は、ランダムな日にちである。そして記すべきことは、2007年から2009年と違い、2024年では「界限」を含む投稿が1万件に達するまで1日しか掛からなかったことである。当時と比べてそもそもX(旧Twitter)のユーザー数が上がったことも考慮する点ではあるが、過去に比べて「界限」という単語がより一般化している、あるいは流行っていることも推測できる。

それぞれ1万件あったそれぞれのデータを、調査に当たり無作為に1,000件ずつを抽出した。理由としては、件数が多く、全件を調査するのは現実的でないと判断したためである。そのようにして、データ1.と2.の1万件が1000件ずつになり、そのデータの添付はVII章別紙で行う。

このデータを使用した調査方法は、集めた投稿の文脈を読み、それぞれ上の第III章2-5で定義した「界限」の4つの意味「①地理的界限」、「②業界的界限」、「③趣味・関心系界限」、「④SNS特有の文化圏」に基づき、各投稿がどの分類に該当するかを分類し、その件数を比較する。なお、データから「界限」の単語が抜けているなどの無効なデータも紛れ込んでいた場合は×と分類する。

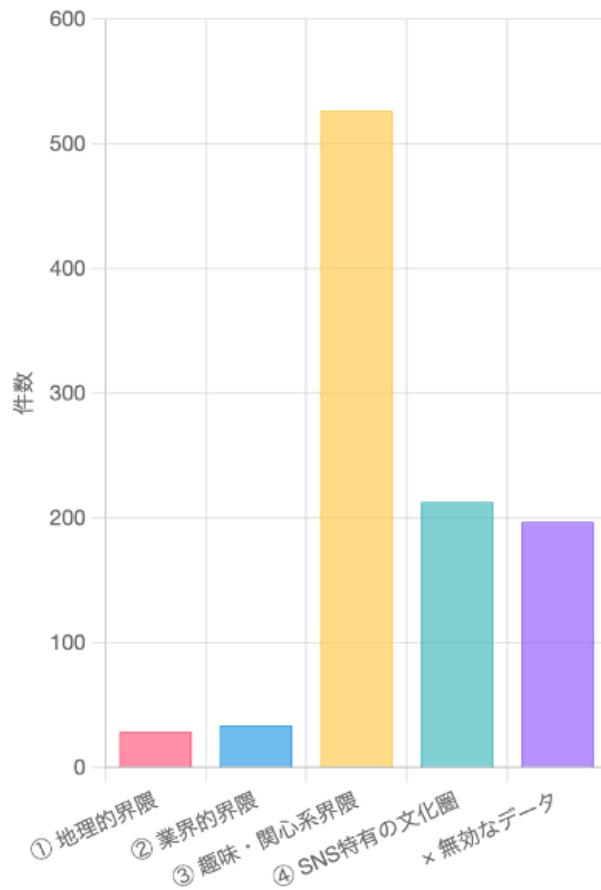
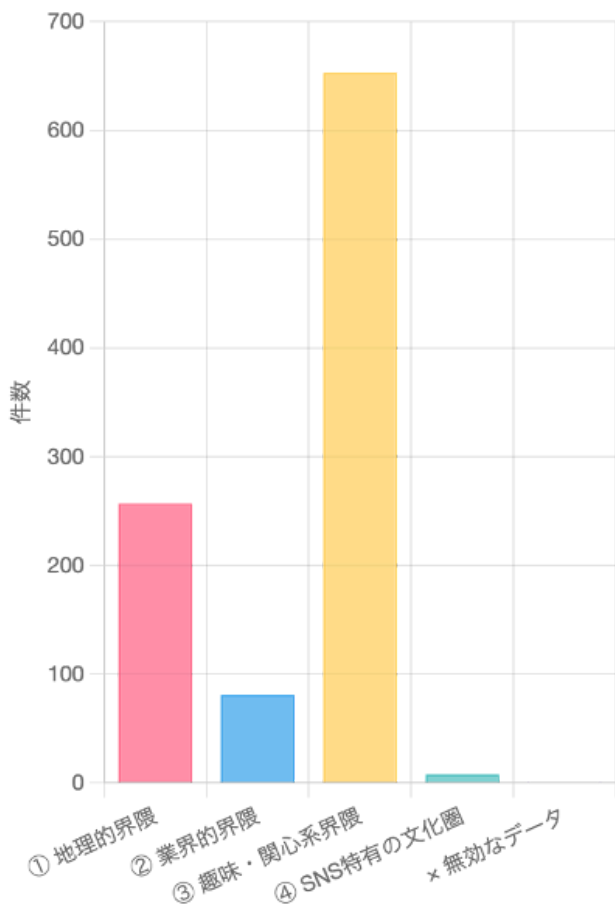
2. 調査結果

調査の結果、データは以下ようになった。

データ1.では①が257件、②が81件、③が653件、④が8件、×が1件になり、合計1000件である。データ2.では①が29件、②が34件、③が527件、④が213件、×が197件になり、合計1000件である。

この2つのデータをグラフや表にまとめると、以下のようになる。

分類	データ1.(2007-2009年)	データ2.(2024年)
① 地理的界限	257件	29件
② 業界的界限	81件	34件
③ 趣味・関心系界限	653件	527件
④ SNS特有の文化圏	8件	213件
× 無効なデータ	1件	197件
合計	1,000件	1,000件



※左がデータ1. の棒グラフであり、右側がデータ2. の棒グラフである。

3. データ分析

調査結果は、2007年から2009年までの「データ1.」と2024年の「データ2.」における「界限」という語の用法を比較することで、その意味の変遷を明確に示している。この結果は「界限」という語の用法がこの約15年間で劇的に変容したことを明確に示しており、特に物理的な概念から抽象的な概念への移行が顕著に表れていて本研究の仮説を強く支持するものである。

3-1. データ1.(2007-2009年)の分析

まずは、データ1.(2007年4月4日～2009年5月8日)の分析から行う。データ1.を見ると、最も多く使用されているのは③「趣味・関心系界限」であり、653件と全体の過半数を占めている。これはSNS、特にX(旧Twitter)の黎明期において、ユーザーが共通の趣味や関心事を通じて緩やかなコミュニティを形成する際に「界限」という語を使用していたことを示唆している。

次いで多いのが①「地理的界限」で257件となっており、この時期にはまだ「界限」の本来の意味である地理的な用法も比較的多く用いられていたことがわかる。②「業界的界限」は81件であり、特定の業種や職種に関連する文脈での使用が見られる。しかし、④「SNS特有の文化圏」はわずか8件と非常に少なく、この時期にはまだSNS特有の抽象的な「界限」概念はほとんど形成されていなかったことが読み取れる。この結果は、意味の変遷仮説である①→②→③→④の初期段階を示唆していると言える。

3-2. データ2.(2024年)の分析

次に、データ2.(2024年10月23日)の分析を行う。データ2では、引き続き③「趣味・関心系界限」が527件と最も多く使用されているものの、データ1と比較するとその割合は減少している。一方で、④「SNS特有の文化圏」の使用が213件と大幅に増加している。この増加は、近年SNS上において、特定の行動様式や価値観などの「現象」を指す抽象的な「界限」が広く認識され、使用されるようになったことを明確に物語っている。例えば、「お気持ち表明界限」や「承認欲求界限」といった表現は、単なる趣味の共有を超え、SNS上で見られる特定の傾向や言説のスタイルをメタ的に捉える言葉として定着したことを示している。

対照的に、①「地理的界限」は29件、②「業界的界限」も34件と、その使用が大きく減少しており、これらの伝統的な用法がSNSにおける「界限」の主要な意味合いから遠ざかっていることがわかる。これは、「界限」という語が、物理的な場所や職業というリアルな制約から離れ、SNS上の非物理的なコミュニティや集合体を指す語として完全に定着したことを示唆している。

また、×「無効なデータ」が197件とデータ1.と比較して増加している点は非常に残念だが存在している。これは、作業の途中で筆者がミスをした可能性も大いにあり、どこでしたのかはわからないが、一方でSNS上での「界限」という語の多様な使われ方が進み、文脈の判別がより困難になった可能性、あるいは調査対象の投稿に含まれるノイズが増加した可能性を示唆しているかもしれないと分析する。

3-3. データ1とデータ2の比較と考察

最後にデータ1.とデータ2.の比較を行う。両データを比較すると、「界限」という語が時間とともに、より抽象的でSNSに特化した意味合いへと変容している傾向が明確に見て取れる。特に、データ1.からデータ2.への移行において、④の用法が著しく増加していることは、SNSが単なる情報共有の場から、特定の文化や行動様式を内包する独自の「空間」を形成する場へと進化したことを裏付けている。一方で、①の地理的用法が大幅に減少していることは、「界限」が物理的な場所の概念から離れ、SNS上の非物理的なコミュニティや集合体を指す語として定着していることを示している。③の趣味・関心系界限は依然として主流であるものの、④の増加は、より細分化され、抽象化されたコミュニティがSNS上で形成されている現状を反映していると考えられる。

これらの分析結果は、本研究が提示した「界限」の意味が①→②→③→④の順に広がってきたという仮説を強く支持するものとも言える上に、「界限」の意味用法の広がりを示唆している。次章では、この分析結果を基に、より深い考察を行う。

V. 考察

本研究のデータ分析によって、「界限」という語の用法が、地理的な意味合いから、趣味・関心を通じたコミュニティ、さらにはSNS特有の抽象的な文化圏を指す意味へと変遷してきたことが明らかになった。特に、2024年のデータ2.では、「SNS特有の文化圏」を指す④の用法が著しく増加しており、これは現代における「界限」概念の広がりを如実に示している。この現象は、バウマン(2001)の「リキッドモダニティ」や宮台(2015)の「地域縁」から「選択縁」への移行という社会コミュニティの変容と深く関連していると筆者は考察する。第II章で

示した「リキッドモダニティ」と「選択縁」の概念、そして第IV章のデータ分析結果を踏まえ、本章では「界限」という語が現代社会で広く普及した背景と、それがもたらすコミュニティ形成の新たなあり方について多角的に考察する。

1. 「リキッドモダニティ」と「界限」の親和性

バウマン(2001)が提唱した「リキッドモダニティ」は現代社会における流動性と不安定性を特徴づける概念であり、人々のアイデンティティや所属関係が流動的で一時的なものとなっている状況を説明する。従来の終身雇用や伝統的な家族のあり方といった、家族や地域の固定的で「与えられた共同体」が弱体化し解体される中で、人々は不確実性と不安定さに直面し自身のアイデンティティや帰属意識を確立するための新たな拠り所を常に模索している。このような社会では、恒久的な帰属先を見出すことが困難になり、代わりに一時的で可変的な「つながり」を求めるようになる。

SNS上の「界限」は、まさにこの「リキッドモダニティ」の特性と高い親和性を持つ。「界限」は、明確なメンバーシップや固定的なルールを持たず、関心や趣味が合致すれば誰でも参加でき、興味を失えば簡単に離脱できる、非公式に形成される緩やかな集団である。個人は、特定の趣味や関心、あるいは一時的な共感に基づいて、容易に「界限」に属したり、そこから離脱したりすることが可能である。このような流動性は、「リキッドモダニティ」における「いつでも変更・離脱可能な選択」という特徴と完全に一致する。個人は、特定の「界限」に深くコミットすることなく、複数の「界限」を掛け持ちすることで、自身のアイデンティティを断片的に、しかし多層的に構築することが可能となる。例えば、あるユーザーが「アニメ界限」では作品について語り合い、「ゲーム実況界限」ではプレイスタイルについて共有するといったように、それぞれの「界限」において異なる側面を演じ分けることができる。このような柔軟性は、固定的共同体がもたらした同調圧力や排他性から個人を解放する。しかしその一方で、流動性の中で一時的な安心感と帰属意識を提供している。

全人格的な関係性は希薄化し、「特定の側面においてのみ関わるつながり」が主流となる中で、「界限」は個人が自己の関心や感性を一時的に共有できる「居場所」を提供する役割を果たしていると言える。

2. 「選択縁」の究極形としての「界限」

また、宮台(2015)の「地域縁」から「選択縁」への変遷の指摘は、「界限」の普及を説明する上で極めて重要である。戦後日本の社会において支配的であった、地縁や血縁に基づく「地域縁」は、都市化や核家族化の進展によって解体され、個人は自らの意思で新たなつながりを選択する必要に迫られた。この「選択縁」に基づく共同体は、趣味や関心、価値観といった内的な基準によって構成される特徴を持っている。

SNSの登場と普及は、この「選択縁」的な共同体形成の条件を劇的に拡張した。物理的距離を超えて共通の関心を持つ他者と容易につながることが可能にし、匿名性やタグ、アルゴリズムといった機能が、微細な感性の共有を媒介する。データ分析で最も件数が多かった「趣味・関心系界限」は、まさにこの「選択縁」の典型的な現れである。

この「地域縁」から「選択縁」への変遷はデータ分析からも裏付けられた。データ1(2007-2009年)では地理的・業界的な用法が一定数存在していたのに対し、データ2(2024年)ではこれらの用法が激減し、趣味・関心

系や、より抽象的な概念である「SNS特有の文化圏」を指す用法が大幅に増加していた。このことは、「界限」という語が、地理的な制約から完全に解放され、個々人の「選択」によってのみ結ばれるコミュニティを指す言葉として定着したことを示している。

特に注目すべきは、第Ⅲ章で定義した④「SNS特有の文化圏」がデータ2において顕著に増加した点である。「風呂キャンセル界限」や「人間を許すな界限」といったSNS特有の抽象的な「界限」は、「選択縁」がより深化・多様化した形態と捉えることができる。これらの「界限」は、単なる趣味や関心を超え、特定の行動様式や感情、言説スタイルといった、より内面的で抽象的な属性を共有する人々を指している。これは、「選択縁」が単なる趣味嗜好の共有に留まらず、もはや明確なメンバーシップや自覚的なつながりをも伴わず、ある種の「傾向」や「属性」を持つこと自体が「縁」として認識されるようになったという、これまでの共同体には見られなかった新たな共同性の形成メカニズムを反映している。さらに「界限」は、個人が自らの意思で「属する」だけでなく、他者によって「分類される」「見出される」対象としても機能しており、選択縁が極限まで多様化し、緩やかに拡散した結果として生じた現象と言える。つまり、「界限」は、自己の感性や行動様式を言語化し、それを承認し合うことで、流動性の中での緩やかなつながりを維持するためのツールとして機能しているのである。

3. 言語的特徴とコミュニティ形成の関係

「界限」という語がこれほどまでに普及した背景には、柔軟性と機能性といった語用論的な機能にも起因すると考えられる。第Ⅲ章で述べたように、「〇〇界限」という形式は、語彙生産性が高く、日々新しい「界限名」が生成されている。複雑な社会関係や特定の集団を、簡潔かつキャッチーなラベルとして提示できる。これにより、SNS上でのコミュニケーションを円滑化し、共通認識の形成を助ける役割を果たしている。これは、多様な関心やごく個人的な感情・行動までも「界限」という形で言語化し、共有可能な「まとめり」として可視化することを可能にしている。

また、「界限」という語は、観察・皮肉・揶揄・共感といった多様なラベルづけ機能を果たしている。④の用法を用いて「界限」は「関係構造／属性集合体」を指す抽象的なメタファーとして用いられ、しばしば皮肉や揶揄、あるいは自嘲的なニュアンスを伴って使用されることもある。「お気持ち表明界限」のように、特定の行動様式を客観化し、批判的な視点から言語化することで、その行動に対する距離感を調整する機能を持っている。これは、特定のコミュニティに深くコミットすることなく、その文化を俯瞰的に観察し、批評する現代的なコミュニケーションスタイルを反映していると言える。「界限」はSNS上でのユーザー間のゆるやかな結びつきや、特定の言説空間を「言語的にマークする」働きがある。このように「界限」は、単に共同体を指す言葉であるだけでなく、自己の立ち位置や他者との関係性を把握し、他者や集団に対する自身の立ち位置を調整するための有効的なツールとしても機能しているのである。

4. 考察のまとめ

「界限」の流行は、「リキッドモダニティ」によって流動化した現代社会において、個人が「選択縁」に基づいた緩やかなつながりを求めるニーズが高まった結果であると言える。SNSというプラットフォームが、物理的な制約を超えた多様な選択縁の形成を可能にし、さらに「界限」という言語がその多様なつながりを可視化し、

人々に新たな形の帰属意識とコミュニケーションの手段を提供した。したがって、「界限」は、現代社会におけるコミュニティのあり方の変容を反映し、同時にその変容を加速させている重要な言語現象であると考察できる。

以上の考察から、「界限」という語が現代社会に普及した理由は、以下の三点に集約される。そして、これらの理由は、「界限」が現代における新しいコミュニティのあり方を象徴していることを示唆している。

「リキッドモダニティ」への適応: 流動的で不安定な社会において、個人が一時的で緩やかなつながりを求めるニーズに合致する、柔軟なコミュニティ形態を表現する言葉であったこと。

「選択縁」の具現化: 地理的制約から完全に解放された、個人の内的な属性や価値観に基づく共同体の究極的な形を言語化したこと。

言語的機能: 複雑な社会関係を簡潔なラベルで表現し、コミュニケーションを円滑化するとともに、他者や集団との距離感を調整するメタファーとして機能したこと。

本章では、社会理論と実証データを統合することで、「界限」が現代社会におけるコミュニティのあり方の変容を象徴する概念であることを明らかにした。次章では、本研究の結論と今後の課題について述べる。

VI. おわりに

本研究では、近年SNS上で頻繁に用いられるようになった「界限」という語に注目し、その言語的特徴、意味の変遷、並びに社会的背景を分析することで、現代社会におけるコミュニティ方の一端を明らかにすることを試みた。

まず、はじめに現代社会におけるコミュニケーションの変化と「界限」概念の萌芽について問題提起を行った。続く第II章では、バウマン(2001)の「リキッドモダニティ」や宮台(2015)の「地域縁」から「選択縁」への変遷といった社会学的な視点から、現代のコミュニティが固定的共同体から流動的なつながりへと変容していることを明らかにし、現代社会の流動性がSNSにおける「界限」の成立を促した社会的基盤であることを論じた。

第III章では、「界限」の多様な形式と意味合いで用いられる言語的特徴を分析し、その意味が地理的なものから抽象的なものへと変遷してきた過程を体系的に整理した。具体的には、「単独使用」、「名詞+界限(○界限)」、「形容詞的修飾を伴う場合」といった形式的な分類に加え、「本来の意味(地理的意味)」、「中間的用法(業界的界限)」、「現代SNS的意味」、「抽象的メタファーとしての『界限』」という意味の変遷を提示した。

そして、第IV章では、X(旧Twitter)の過去と現在のデータを比較分析することで、「界限」という語の使用実態を検証し、意味変遷の仮説を実証的に裏付けた。2007年から2009年までの「データ1.」と2024年の「データ2.」の比較により、地理的・業界的な用法が減少し、趣味・関心に基づく用法が主流でありつつも、特にSNS特有の抽象的な意味合い(④)が近年著しく増加していることが明確に示された。このデータ分析の結果は、本

研究が立てた「界限」の意味が①→②→③→④の順に広がってきたという仮説を強力に支持するものであった。

V. 考察では、これらの分析結果と先行研究を踏まえ、「界限」がここまで流行した理由と現代社会のあり方との関連性を深く掘り下げた。その過程で、(1)「リキッドモダニティ」が示す流動的な社会において、人々が一時的で可変的な「つながり」を求めるニーズが高まったこと、(2)宮台(2015)の指摘する「選択縁」の概念がSNSによって劇的に拡張され、趣味・関心だけでなく、特定の行動様式や価値観といった抽象的な属性を共有する緩やかな集合体までもが「界限」として言語化・可視化されるようになったこと、(3)「界限」という語自体が持つ言語的な柔軟性と語彙生産性の高さが、多様な関係性を表現し、コミュニケーションを円滑にするツールとして機能していること、といった多角的な側面が明らかになった。

以上の研究から、本論文は以下の結論を導き出す。すなわち、「界限」という語は、流動的で不安定な現代社会において、個人が一時的で緩やかなつながりを求めるニーズに合致する、新しいコミュニティのあり方を象徴する概念である。これは、地縁や血縁に代わり、個人の内的な属性や価値観に基づいて結ばれる「選択縁」の究極的な形を言語化したものであり、特定の集団を簡潔なラベルで表現し、コミュニケーションを円滑化する機能も果たしている。

しかしながら、本研究にはいくつかの限界が存在する。第一に、本研究のデータ分析はX(旧Twitter)の投稿に限定されており、他のSNSプラットフォーム(例:Instagram、TikTok、YouTubeなど)における「界限」の用法を網羅的に分析できていない点である。プラットフォームごとにユーザー層や文化が異なるため、この点は今後の研究課題と言える。第二に、データ抽出がキーワード検索に依存しているため、検索ワードに含まれない「界限」の用法を捉えきれない可能性がある。第三に、本研究は投稿件数の比較という量的な分析に留まっており、「界限」内部での実際のコミュニケーションの内容や、個々のユーザーが「界限」に抱く帰属意識の深さといった、質的な側面については十分に分析できていない。

これらの限界を踏まえ、今後の研究として以下の展望が考えられる。まず、異なるSNSプラットフォームを対象とした「界限」概念の比較研究を行うこと。これにより、プラットフォームが「界限」の形成に与える影響を明らかにすることができるだろう。次に、特定の「界限」に属するユーザーへのインタビュー調査や、投稿内容の質的分析を行うことで、「界限」内部の規範や共通認識、そして個人の心理的側面をより深く探求すること。最後に、本研究が示した「界限」の意味変遷をさらに遡り、他の語(例:「コミュニティ」「クラスタ」など)との関係性を歴史的・社会言語学的に分析することで、「界限」概念の独自性をより明確に位置づけることができるだろう。今後は、「界限」内部におけるコミュニケーションの詳細な分析や、異なるSNSプラットフォーム間での「界限」の形成様式の比較、さらに「界限」の持つポジティブ・ネガティブな側面(例:閉鎖性、排他性など)についても多角的に研究を進める必要があるだろう。

以上、本研究は「界限」という日常的な語彙を手がかりに、現代社会におけるコミュニティのあり方がいかに変容し、SNSがその変容にいかなる影響を与えているかの一端を明らかにした。「界限」という語が持つ現代的な意味と言語学的特徴を解き明かすことを目的とした本研究が、社会がどのように変化し、人々がどのように新たなつながりを求めているのかを考察する一助となれば幸いである。

VII. データの記載(この章のみ別紙)

本研究内で使用したデータ1.とデータ2.の記載を別紙にて行う。

1. データ1. (2007-04-04～2009-05-08)の記載
2. データ2. (2024-10-23)の記載

VIII. 参考文献、辞書・コーパス

参考文献

- Baudrillard, Jean., *Simulacres et Simulation*, Éditions Galilée, 1981. (『シミュラークルとシミュレーション』竹原あき子訳. 新装版、法政大学出版局、2008.)
- Bauman, Zygmunt, and Benedetto Vecchi. *Identity: Conversations with Benedetto Vecchi*. Polity Press, 2004. (『アイデンティティ』伊藤茂訳. 東京、日本経済評論社、2007.)
- Bauman, Zygmunt. *Liquid Modernity*. Polity Press, 2000. (『リキッド・モダニティ: 液状化する社会』森田典正. 東京、大月書店、2001.)
- Bauman, Zygmunt. *The Art of Life*. Polity Press, 2008. (『幸福論: “生きづらい”時代の社会学』山田昌弘、高橋良輔訳. 東京、作品社、2009.)
- Castells, Manuel., *The Rise of the Network Society*, Cambridge, Blackwell Publishers, 1996.
- Fries, Peter Howard, Gregory, Michael. *Discourse in society: systemic functional perspectives: Meaning and choice in language: studies for Michael Halliday*. Norwood, N.J, Ablex, 1995.
- Goffman, Erving. *The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday, 1959. (『日常生活における自己呈示』中河伸俊, 小島奈名子訳. 東京、筑摩書房、2023.)
- 『アイドルマスターシリーズ』Wikipedia, ウィキメディア財団, 最終更新日 2025年8月1日, <https://ja.wikipedia.org/wiki/アイドルマスターシリーズ>.
- 朝日新聞.『「界限」でつながる若者 学校では話さない「深い」コミュニティー』
<https://www.asahi.com/articles/AST4755ZRT47UCVL01DM.html>
- 遠藤英樹、松本健太郎、江藤茂博.『メディア文化論: 想像力の現在』第2版、京都、ナカニシヤ出版、2017.
- 加藤重広.『意味論・語用論から学ぶ日本語文法』くろしお出版、2021.
- 奇奇怪怪.『界限ってなんなん』2024.
<https://podcasts.apple.com/jp/podcast/%E7%95%8C%E9%9A%88%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%AA%E3%82%93%E3%81%AA%E3%82%93/id1512077804?i=1000679252849>
- 集英社新書プラス.『界限民俗学 第1回「界限」という結界』
https://shinsho-plus.shueisha.co.jp/column/kaiwai_minzoku_gaku/29512.
- 田所承己.『場所で行き交う/場所とつながる: 移動する時代のクリエイティブなまちづくり』東京、弘文堂、2017.

- 徳田剛.『よそ者/ストレンジャーの社会学』京都、晃洋書房、2020.
- 博報堂・SHIBUYA109 lab.「界限消費——生活者発のコミュニティ起点で起きる、未来の消費とは？」『Future Evangelist Report Vol.3』2024.
- 橋元良明.『メディア』東京、ひつじ書房、2005.
- 堀井聡江.『「界限」という言葉の変遷に見るSNS空間論、言語と社会、Vol.15』「言語と社会」第15号、社会言語科学会、2023.
- 町田健.『現代日本語の構造と変化』研究社、2020.
- 宮台真司.『社会という荒野を生きる。：宮台真司ニュースの社会学』東京 ベストセラーズ、2015.
- 村上祐子.『デジタル社会の日本語』岩波新書、2021.
- 三宅和子、新井保裕.『境界と周縁：社会言語学の新しい地平』東京、ひつじ書房、2025.
- メイナード泉子K. *Japanese conversation: self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, N.J.: Ablex Pub., 1989.
- 吉見俊哉.『メディア時代の文化社会学』東京、新曜社.
- ラジトピ.『Z世代に人気の水色界限／天使界限って？ ブランド担当者→「推し活・Y3Kから派生した新ファッション」』<https://jocr.jp/raditopi/2023/04/20/497525/?detail-page=1>、2023.

辞書・コーパス

- 岩波書店.『広辞苑 第六版』2008.
- 国立国語研究所.『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』.
- 小学館.『精選版 日本国語大辞典』デジタル版.
- 三省堂.『新明解国語辞典 第七版』2011.
- 『デジタル大辞泉』小学館、<https://kotobank.jp/>.